



井 上 正 吾 著 「精 神 障 害」

リハビリテーション全般についていえることであるが、とくに精神障害者のリハビリテーションをとりあげる際、関係者が異口同音に口にするのは社会の偏見、差別あるいは保安優先の収容隔離の現状である。これは、日頃精神障害者と直接交わる機会をもたない人にも、最近の精神医療に関する一連の告発やキャンペーン等マスコミによってすでに紹介済みのことと思う。そこから『いったい、今精神医療の現場はどうなっているのか』とか『精神障害者のリハビリテーションはどうなるのか』などと発展的に関心を向けられる方はもちろん、教養の一端としてこのテーマを一通りざっと勉強しておこうという方にも、本書は格好の知識を与えてくれる。また発症すると社会では危険なもの、無能なものとして不当に差別され、抑圧されてしまう「我邦十何万ノ精神病者ハ実ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ、此邦ニ生レタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云

フベシ」ということばの再吟味が強く叫ばれる現時点では、タイムリーな読書を提供してくれるにちがいない。

内容は精神障害と精神薄弱とに二分され、次のような構成をとっている。

第Ⅰ編 精神障害者のリハビリテーション

第1章：精神科領域におけるリハビリテーションについて 第2章：わが国の精神医療の歴史 第3章：病院におけるリハビリテーション活動の背景 第4章：地域社会におけるリハビリテーション 第5章：リハビリテーション活動の実際 第6章：症例を中心としたリハビリテーション活動の実際

第Ⅱ編 精神薄弱者のリハビリテーション

第1章：精神薄弱者のリハビリテーションとは 第2章：精神薄弱者と社会 第3章：精神薄弱者の医療 第4章：精神薄弱者の心理

第5章：精神薄弱者の教育

各論は一部重複したり書き足らなかつたりした面もありそうだが、全篇を通しては読みごたえのあるものであった。さらに望むとすれば編者も序の中でことわっているように、精神薄弱以外の小児精神医学の分野についてもつけ加えられたらよいと思う。

ともあれ、本書はコンパクトにまとまった実践的教科書であり、読み終ってもっとも心に残るのは、今何をなし何を考えるべきかという医療者側の努力の方向性をさぐる、緊迫し、はりつめた雰囲気である。このようなぎりぎり精一杯の実践の姿を真近にして、障害者の家族や実践者、学生など多くの読者は、おそらくそこに安堵感と希望を見出すにちがいない。

A5判、380 ページ、2500 円
医歯薬出版刊

(都立松沢病院、作業療法士
小林 夏子)